

# 図書館 forum

## 福井大学附属図書館報 No. 4

附属図書館の役割 .....	内田 高峰	1
いつでも夢と希望を .....	犬塚 學	2
Green Leaves Project を紹介します .....	水野 和子	5
福井大学附属図書館所蔵の古典籍(1) 雪国大百科全書「北越雪譜」 .....	膽吹 覚	8
《私の推薦書》		
「仙人はほんとうにいるのですか？」 .....	澤崎 久和	10
数とシンメトリーと無限と .....	三上 俊介	12
ヘロドトス歴史, 司馬遷史記列伝, 古事記 ～意外に面白い世界の古典 .....	寺田 聡	14
機関リポジトリの構築に向けて .....	高木 昭	17
医学系大学図書館のもう一つの役割 - 患者さんへの医療情報提供 - .....	木村 幹明	18
医学図書館からのお知らせ .....		21
トピック情報 .....		23

# 附属図書館の役割

附属図書館長 内田 高峰

うちだ・たかね

昨年度に附属図書館長の兼務が話題になったとき賛否両論が出され、役割の軽重やその資質について若干の議論があった。当の本人としては、何とかなるとは思ったものの深く考えてはいなかった。しかし、就任後図書館の自己点検評価が焦眉の課題であり、また、大学認証評価が日程に上り、附属図書館の質や量が問われることを目前にして、図書館長が為すべきことが気になり出した。少し遅きに失したきらいがあるが、幸い今年（'07）正月早々に第2回国立大学図書館長懇談会が開催され、これに出席して全国の図書館長の活動の様子について情報を得ることができた。またその後、昨年（'06）の第1回懇談会の講演資料にも接し、附属図書館及び図書館長の役割について認識を深めることになった。本稿では現時点での私の思いの一端について記してみたい。今後の図書館運営の一助となれば幸いである。

先ず上記第1回懇談会での、元東大附属図書館事務部長で三重県立図書館長などを歴任されている雨森弘行氏の「大学図書館の経営－図書館長の在り方とその役割」と題する示唆に富むご講演の資料から一部を引用させて頂く。

<大学図書館長の理想像>

①大学と図書館についての哲学・ヴィジョンをもつ。②改革にむけて戦略を策定し、リーダーシップを発揮する。③大学中枢（学長等）への太いパイプをもつ。④学内・外への広報を積極的に展開する。⑤中間管理職（部課長、事務長）を十分機能させる。⑥意欲ある（できる）職員

の能力を伸ばす機会を与える。⑦職員（ときには全員）の言い分に十分耳を傾ける。⑧事務組織と職員の立場（職位）に配慮する。⑨業務外での交流も含めて、職員との信頼関係を築く。⑩全館的なリスクには、職員とともに対処する。  
<大学図書館職員の理想像>

①サービス精神が旺盛である。②何事によらず積極的である。③社会（環境）の変化に敏感である。④現状に対して常に問題（危機）意識をもつ。⑤館長（管理職）をサポートする図書館経営の感覚をもつ。⑥自ら立志・発意し、企画・立案ができる。⑦情熱をもち、率先垂範する行動力をもつ。⑧他人の言うことを良く聴き、謙虚に受けとめる。⑨図書館情報学とシステムに関する最新の知識をもつ。⑩得意の専門分野（語学を含む）をもつ。

それぞれ10項目を挙げておられるが、大半は図書館に限らず、大学の管理職と職員の資質・役割として一般的に必要な事項であろう。しかし、本学図書館に限定すれば、これらをどのように考えればよいのか。大学の理念・目標は設定されている（大学憲章も近い内に…）が、それらを反映する図書館の目標設定には至っていないし、情報の電子化に伴う情報処理センターとの連携（必要ならば一体化）の方針なども定まっていはいない。また、大学全体の人員削減の中で非常勤職員の比率が増加し、サービス業務の弱体化や、職員の専門性の獲得が難しくなっていることは図書館の質の低下につながる。さらに、図書館にとって困惑の極みとなっ

ているのが、学生諸君の読書離れであり、それに呼応しているのか、教員からの購入図書推薦意欲の低下である。この他、大学図書館には地域住民を対象とする公立図書館との連携が必要であるが、基本的な設置の目的や機能の認識の違いなどの議論・調整からはじめる段階にある。

また、本学図書館の場合、「総合図書館」「医学図書館」共に、増改築問題が焦眉の課題である。「総合図書館」では、耐震強度の改善のための改修が近い将来期待できそうになってきて

いるので、その好機を逃さずに増改築計画を準備することが必要であろう。関係部局との調整や協働が期待される。

このように本学図書館では「図書館経営戦略」以前の課題が山積し、それらの地道な解決が先ず求められている。そしてそのことが、小規模ではあるが特色ある大学としての位置付けを獲得する地方大学の図書館の役割であり戦略となる。来年度の自己点検評価の結果なども参考に、本学図書館の明確な位置付けと発展を期待したい。

## いつでも夢と希望を

医学図書館長 犬塚 學

いぬづか・まなぶ

久しぶりに、むかし、勤務していたカリフォルニア大学サンジエゴ校（UCSD）のホームページにアクセスした。以前、学会出席の際に立ち寄った時に、改築計画が進行していた Biomedical Library のその後を知りたくなったからだ。医学部に隣接して、ユーカリ林のそばにでんと存在した図書館は、私にとっては文献を見に行ったり、ソファでビデオを見たりと有意義な場所だった。それが、昨年秋には、前よりは一段と広く立派なモダンな建物に生まれ変わっていた。真新しい玄関を入ると、明るい吹き抜けのホールの奥に、長いサービスカウンターが続き、さらにライブラリーインフォメーションコモンには、80台のワークステーションが用意されている。大学院生用の部屋も特設され、またグループ利用ができる小部屋も完備されている。各テーブルにパソコンを配置した大部屋は講習会やセミナーの開催などに多

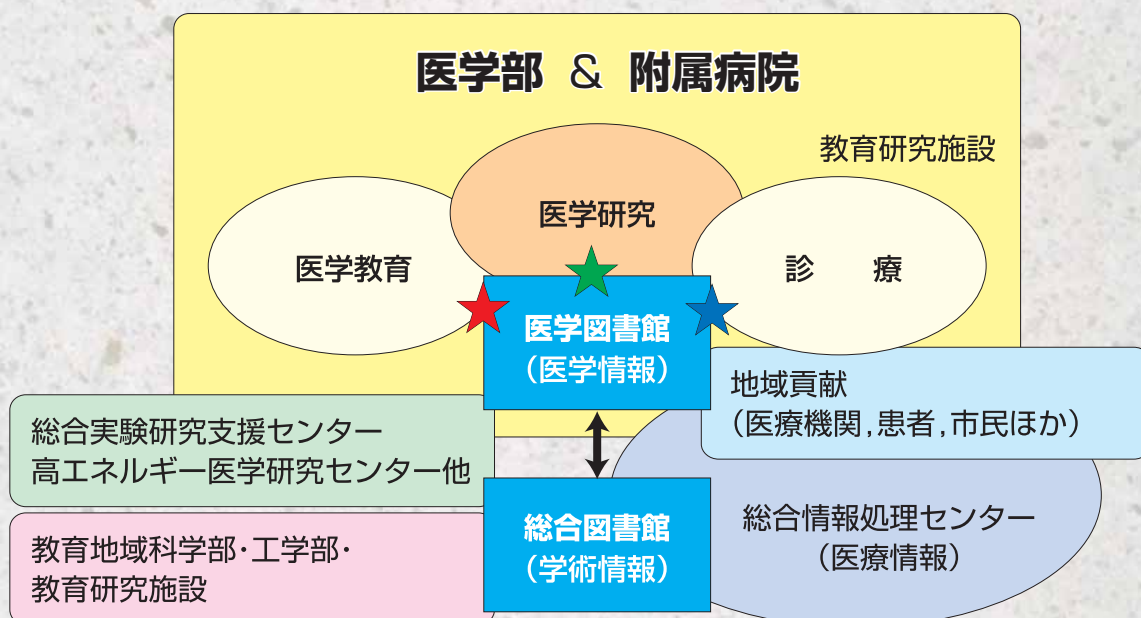
いに役立ちそうだ。2階には、車椅子が通れる書架が並び、膨大な数の集密書架と共に、長期に渡っての書籍の保存も心配ないようだ。広大な閲覧室には机や柔らかい椅子も多数用意されている。さらに、ベストセラーや雑誌も読めるレクリエーション読書エリアには、深々としたソファがあり、生命誕生のネットワークを眺めながらしばしリラックスできるようになっている。同一キャンパス内で、車で5分位のところにある UCSD 中央図書館はさらに大きなもので、これらの大学図書館を利用できる学生や教職員がうらやましくも感じた。そう言えば、1カ月余滞在した Duke 大学 Medical Center も、その医学図書館は大学内のモノレールを降りるとすぐそばにあり、やはり便利で素晴らしいものだった。

我が医学図書館の現実に帰ると、毎年、学生から出てくる強い要望として、「閲覧室などの

机と椅子、特に一人用のものを増やしてほしい」がある。昨年度は、希望に添って増設したが、もう、新たに追加するスペースもなくなってしまった。これは25年前に竣工した図書館が、医学科学生のみを対象にして建てられており、その後の大学院や看護学科の新設への対応、増築が全くされていないからだ。学生・院生・教職員等の来館者は、年間13-14万人で、旧福井市人口の半分にも達するほどだ(ちなみに、東大医学図書館の入館者は9万人余)。これは、自動入退館システムや図書の自動貸出返却シス

テムの導入により、臨時休館日を除いて、365日、24時間利用可能にしていることにも因るのだろう。

しかし、特に、国試や定期試験に向けての勉強などで、たくさんの書籍を広げて、深夜まで頑張っている学生諸君に、座席の確保という最低限の利用環境を十分に提供できない現実には悲しくなる。そこで、現在、計画されている「福井大学教育研究振興資金による医学図書館の改修」に大きな希望を託すことになりそうだ。



- ★**医学ミュージアム**  
(教育資料展示・自己学習スペース、学生の課外活動成果の展覧)
- ★**研究成果展示エリア**  
(成果広報・共同研究推進・院生募集)
- ★**患者図書室**  
(附属病院でのコラボレーション・最新医療情報／生活情報紹介、医療実績／成果の広報)

現状からは少し飛躍するが、将来的な夢を描いてみたい。全く個人的な見解だが、松岡キャンパスの再開発時までには、医学図書館の在り方

について全面的な検討が必要と考える。総合情報処理センターほかの手助けも受けて、1) 医学教育とリンクした医学ミュージアムの設置；

ここでは、教育資料の展示と自己学習、例えば、学生は自分の好きな時間に、実物やデジタル化された病理標本や解剖資料などを学習できたり、展示された教材を利用できる。また、ここでは、学生の課外活動成果も広く周知され利用される。現に、医学部の華道部の皆さんが毎週、きれいな生け花を図書館に生けてくれて、素晴らしい環境を醸し出してくれている。2) 医学研究成果の展示エリアの設置：前述のように、非常にたくさんの方が利用する図書館は、学内外への広報基地としての役割も担えそうだ。3) 附属病院とのコラボレーションによる患者図書室：医療実績に加えて、患者さんやご家族の視点に立った正確な医療情報や医療生活情報の提供は、今後、ますます必要になって来ると思われる。4) 地域貢献については、本号の木村氏の稿に譲る。5) 附属図書館友の会 (Friends of UF Libraries) の設置：団塊の世代を含む方々によるボランティア活動や個人・事業体などからの経済的支援を願う。こんな夢と希望を描いている。

今後の図書館運営において、先ず、法人化後の厳しい財政状況の中で、電子ジャーナル (EJ) 経費の特定事項経費化を決断された首脳陣および医科大時代から継続して医学図書館に援助して下さっている医学部および附属病院の執行部の方々に深く感謝する。これからも変わらぬご支援を切にお願いしたい。一方では、今後のEJや書籍代の値上げに如何に対処して行くかなどの差し迫った問題を抱えている。附属図書館も自己点検評価小委員会を中心にして、教育・研究・診療・地域社会への貢献などの内部評価や外部評価を通じて、組織や管理運営を見直しながら進んで行く必要がある。多くの人たちに必要とされる施設であり続けるためにも。

「研究活動に不可欠ないわゆるライフラインの性格を有する研究情報基盤の整備 (第3期科学技術基本計画 (H18 - 22))」に夢と希望を重ねながら、この重要な教育研究施設の行く末を見つめて行きたい。これまでの多大なご支援に感謝しつつ。



医学図書館

# Green Leaves Project を紹介します

大学院工学研究科生物応用化学専攻助教授 水野和子

みすの・かずこ

## 1. はじめに

2006年度大学教育入門セミナーで生物応用化学科は新生に学科の全教員がそれぞれ2冊ずつ推薦する本のうちで、読みたい本を5冊以上読んで簡単なレポートを書くということをやりました。目的は、新生に、日本語力と専門分野の学問への興味を持つことがこれからの学生生活で重要であることを気づいてもらうことでした。卒業研究や大学院時代をこれに先立つ花が咲き実がなる時期と考え、これに入学後の3年間を、根を張り、葉を茂らす時期と捉えて、Green Leaves Project と名付けました。一連の作業でやったこと、得られたことをまとめてみます。

## 2. GLP の概要

GLP を始めた理由や準備段階のことは後回しにして、2006年度の新入生が何をやってきたのかというGLPの概要を初めに述べます。

- 1) 新生を迎える準備として前年度中に、短いメッセージをつけて推薦図書のリストを作ります。1図書あたり5冊の合計で200冊を買い揃えておきました。
- 2) 新生は、助言教員と一つのグループを作ります。そして、助言教員の推薦図書を読み、推薦図書ごとにB3サイズ1枚の「宣伝ポスター」を作成します。宣伝ポスターには、書名・著者名・出版社・出版年・推薦教員名・製作者名の他に、実際に読んだ上で、なぜこの本を勧めるのかが伝わるような文章を書いて、これにふさわしいイラストやデザインで飾って下さいと注文しました。
- 3) 教員は自分の選んだ図書について全員の学生に

知ってもらうために、コマースタイムを持ちました。

- 4) この後で、「宣伝ポスター」のパネルと本を並べた「お店」で本を貸し、また「お店」を歩き回って本を選ぶ、「貸し出し大作戦」をしました。学生は40種の中から2～3冊を借り出します。そして、借りたうちの1冊についてA4版1ページ程度に一番おもしろかったことを書いてその本を推薦した教員に提出し、教員は短くてよいかからコメントを書いて返すことにしてあります。
- 5) 2週間に1度ずつ、「貸し出し大作戦」を大学入門セミナーの時間にくり返します。
- 6) 5枚のレポートを重ねて、読んだ図書のリストをつくり、今後の学習に読書をどう生かすかを書いた「まとめのレポート」を書き加えて表紙としてファイルしました。これを担任教員に提出し、この学期のGLPの収穫としました。本稿の最後に、学生のまとめのレポートを紹介いたします。

担当；GLP-Working Group（水野和子，寺田 聡，三浦潤一郎，前田 寧）

## 3. 「面倒見のよさ」くらべ

GLPの新生コースのキーワードは「面倒見のよさ」です。大学生にそこまでやりますかと言われる前に、自嘲的に開き直っているように聞こえるこのキーワードは、毎日新聞の記者が全国の大学の実情をルポした記事から借りたものです。今や全国の大学に「面倒見のよさ」が充満していて、文科省の予算の多くが、この面倒見のよさのための予算ではないかとさえ言わざるを得ない、どこか寂しいと記者氏が嘆いているのを納得して読みました。GLP

の場合の「面倒見のよさ」について述べます。

**GLPのきっかけ**；私は2004年度の4月に「化学熱力学」の授業を初めて担当するのを機に、2年生に「去年1年間に読んだ本」のことを訊いて見ました。そして、大学入学後の1年間に全く本を読まなかった学生が67名のうち17名、1冊読んだ学生が14名、たった1冊だけ読んだ本の中に、「冬のソナタ・上」というのがありました。集計の結果をながめて、しばらくは呆然でした。0冊の学生の多さは予想をはるかに超えるものでした。そして、「冬のソナタ・上」がもたらしたのは寂寥感というべきものでした。折しも「ヒトゲノム計画」などで、書店には生物応用化学科の学生を立ち止まらせる本があふれていたのです。しかし、「冬のソナタブーム」ほどには学生をひきつけることがなかったのです。私は、新入生をこれから本格的に始まる専門科目の世界に引きずり込むための強引さが必要であると思いました。これは余裕のある、優しさいっぱいの「面倒見のよさ」とは明らかに違う、むしろ授業を進める私の方都合として、やらざるを得ないものといったほうがいかもしれないものでした。

GLPがどの大学にも見られる「面倒見のよさ」のひとつにすぎないと見られるのは仕方がないとしても、きっかけはこのように切実です。というよりも、記者氏に「面倒見のよさ」と写った全国の大学のプロジェクトにはどれも、元をただせば教員の「やらざるを得ない切実な思い」が込められているはずなのです。

教科書を読むための論理性と専門科目への興味を持ってもらうための方法として、私は迷わずに「私が選んだやさしい科学の読み物を学生に読んでもらうこと」を決め、実行に取りかかりました。ここで私が「迷わなかった理由」をくどくどと述べる必要はないと思います。講義を担当するようになるまでの長い間、研究室の学生と「英語版・物理化学の教科書」の訳をしてきた「朝ゼミ」の経験から、学生には「物理化学」だけに止まらずに、生きていくための力として「日本語力」あるいは「言葉力」があると確信してきました。

**本を選ぶ**；私が「化学熱力学」の宿題として選んだ本読みの図書は次の7冊でした。これらの本は、「中学生から大人まで」というのをつけてもよい本ではないかと思って選びました。

水を知ろう（荒田洋治・著）、これだけは読んでおきたい科学の10冊（池内了・編）、化学の基本7法則（竹内敬人・著）、物理のトビラをたたこう（阿部龍造）、物理が苦手になる前に（竹内淳・著）、宇宙と生命の起源（嶺重慎、小久保英一郎・編）（以上岩波ジュニア新書）、熱とは何だろう（竹内薫・著・講談社ブルーバックス）

はじめは宿題だからいやいやでも読んで、あるいは目次とごく一部からの抜粋でレポートを書いてきた学生も多かったのが、回を重ねるにつれて明らかに変わってきたことがわかってきました。そして、学期末には、多くの学生が「来年度の学生にも本をおすすめ」と私のアンケートに答えてきたのです。

私は2年生ではなく、新入生に同様のことをやってみられないかと考えるようになっていました。しかも、私一人ではなく、学科全体の取り組みとして、すべての先生に加わってもらえる方法を模索し始めていたのです。入学後の1年間こそ、日本語力と専門分野の学問への興味のための大事な時間のはずという気持ちでした。翌年の2005年度「競争的配分経費（教育に関する評価経費）」で「読書のプログラム化による学ぶことへの動機づけ：「本を読む学生」を育てることで、学ぶことの意味づけができる学生を増やす試み」という長たらしい題目で配分を受けることができ、新入生に対する学科の取り組みとしてあらためて取り組むことになりました。

**GLPのスタート**；実際に学科の先生方の全員から推薦図書を集め始めてたちまちわかったことがありました。それは推薦図書の内容の多彩さでした。私も読んでみたいと思う本が現れる度に、学科でやってよかったと思いました。

#### 4. これまでのまとめとこれから

さて、実際に新入生にとってGLPは何かをもたらすことができたのかということに触れておきま

す。学生の反応として最も多かったのは、サイエンスの本をほとんど読んだことがなかったが、自分が知らない世界があまりに多いと知った、これからも本を読みたい、といういわば予想されたものでした。一方で思いもしなかった拾い物がありました。それは「貸し出し大作戦」のやりとりから生まれた交友関係でした。考えて見ますと、同じクラスとはいえ、授業時間中に自由におしゃべりができるということはまったくないので、4年間というもの一度も話さなかったクラスメートも少なくないのが実情なのです。「貸し出し大作戦」はこともあろうに、おしゃべりが求められる授業でした。そのあまりの喧騒に、隣の講義への迷惑を考えていつそのこと戸外ではどうかと思って、底這川の森でやったりもしました。そして、ある学生から「もっとゆっくりと本選びがしたい」ということが出てきて、2007年度は図書館のロビーに推薦図書を一組、「禁帯出」で置いてもらうことになりました。「同じ本」から生まれる新入生の友情のために、騒がしくできる教室を探そうと思ってしまいます。

2006年度「競争的配分経費（教育に関する評価経費）」の配分を受けて、2年生、3年生の講義で読んでほしい図書を複数冊のセットで買い揃えることができ、また、2007年度の4月からの新入生用の図書も揃えました。同じ本を何冊も揃えるという、図書館の予算では無理なことが可能になるという点で、配分を受けたことは本当にありがたいことでした。後期になってから写真のように図書館のロビーの壁に宣伝ポスターを並べ、その前に推薦図書を置いていただいています。2年生にも読んでもらい、また全学の学生さんに貸し出しをしてもらっています。2007年度は、図書館と協力してGLPを進めることになりました。

最後に学生のまとめのレポートの中から、とびきり素敵な、つまり私にとってうれしくて、都合のよい文章を紹介します。

---

専門的と思って読んだ本が文系の人のための本と知ったとき自分の知識のなさに残念な気持ちになりました。……

---

今回の読書から得られたことは、今の自分に国語力が全然足りないなということを感じさせられ、読書をして、日本語を読めるようにしないといけないということを実感できたことです。日本語で書いてあるのに理解できないというところもあって、これは自分は読書の大切さを甘く見ていたなということを感じてきたので、……

---

私が読んだ本に出てきた研究者達は、不思議に思ったり、驚いたこと、納得できないことなどの感情を大事にし、それを解決するため追い求めた結果、今に残る発見をしていました。……

---

今回の読書から得たことは、今の自分に必要なことは「どうしてこうなるのか?」「何がこのようにしているのか?」というような疑問を日常生活の中でたくさん持ち、そのことを調べようと行動することだということ、そして調べている途中で壁にぶつかったら、じっくりと悩むことだということです。



宣伝ポスターと推薦図書



## 福井大学附属図書館所蔵の古典籍(1)

## 雪国大百科全書『北越雪譜』

留学生センター助教授 臆 吹 覚

いぶき・さとる

『北越雪譜』(ほくえつせきふ)は、江戸時代に出版された挿絵入りの雪国大百科全書です。越後の国(現在の新潟県)の塩沢に住む鈴木牧之(すずきぼくし・1770 - 1842)が書きました。

この本は初編3巻3冊と第2編4巻4冊とから成ります。その初編には顕微鏡で見た雪の結晶をはじめ、雪の中に生きる虫たち、雪崩や吹雪やつららの話など、今日の自然科学に関することをはじめ、雪国に生きる熊や鮭の生態といった生物学に関すること、越後縮などの伝統産業に関すること、雪の中の幽霊の話といった怪奇現象といった文化人類学の話など、雪にまつわるありとあらゆるエピソードが掲載されています。そして、その第2編は春夏秋冬に分けて、里人の風俗習慣や年中行事など、雪国の生活全般が描かれています。

本学附属図書館所蔵の『北越雪譜』は、残念ながら、その第2編のみで、その初編がありません。初編は、江戸後期の天保6年(1835)に刊行され、700部を超えるベストセラーとなり、そこで第2編の出版ということになったわけです。

本学所蔵の第2編の書誌を記しますと、資料番号は388/SUZ。4巻4冊本。寸法は縦25.7cm×横18cm。印記は、各冊第1丁表に「詠善堂図書」(方形朱印)、第1冊刊表紙見返しに「福井大学図書館印」(方形朱印)が捺されています。表紙は薄墨色の背景に雪の結晶と思われる模様が散らされています。この表紙の色は、もちろん、雪を降らせるどんよりとした空のイメージです。冬になると、みなさんが毎日のように見ている、あの鉛色の空です。そして、その

空から舞い散る雪が、結晶の形で、美しく表紙に描かれているのです。工夫を凝らしたお洒落な表紙です。表紙の表紙左肩部には刷り題簽があり、そこに隷書体で「北越雪譜」とあります。

表紙の見返しは、その周囲を何種類もの青色の雪の結晶で囲んでいます。これも雪の大百科全書ならではのデザインといえるでしょう。『北越雪譜』は、現在では岩波文庫をはじめ、その翻刻や現代語訳が数多く出版されていて、一般にも容易に手にすることができます。しかし、本書が出版された当時、江戸時代の『北越雪譜』でなければ、こうした雪を意識した装丁の美しさを楽しむことができません。古典籍の楽しみのひとつは、まさにここにあるのです。

さて、表紙見返しには、次のようにあります。

北越雪譜 二編四巻

越後 鈴木牧之編撰

江戸 京山人百樹増修

京水百鶴画図



表紙



第一冊表紙見返し

天保辛丑新刻

書肆 文溪堂発販

この記事によりますと、『北越雪譜』は鈴木牧之が書いた原稿に、江戸の山東京山が添削補筆し、絵は牧之が書いた絵をもとに、京山の弟子の画家、京水が書き直したものを掲載したことがわかります。「天保辛丑」は、天保12年（1841）です。江戸の文溪堂という本屋が販売していました。初編も同じく文溪堂から出ています。刊記は第4冊後表紙見返しに、

天保十三年壬寅孟春

心齋橋通順慶町

全志発行書林 大坂 堺屋新兵衛

心齋橋通博労町

河内屋茂兵衛

江戸 小伝馬町三丁目

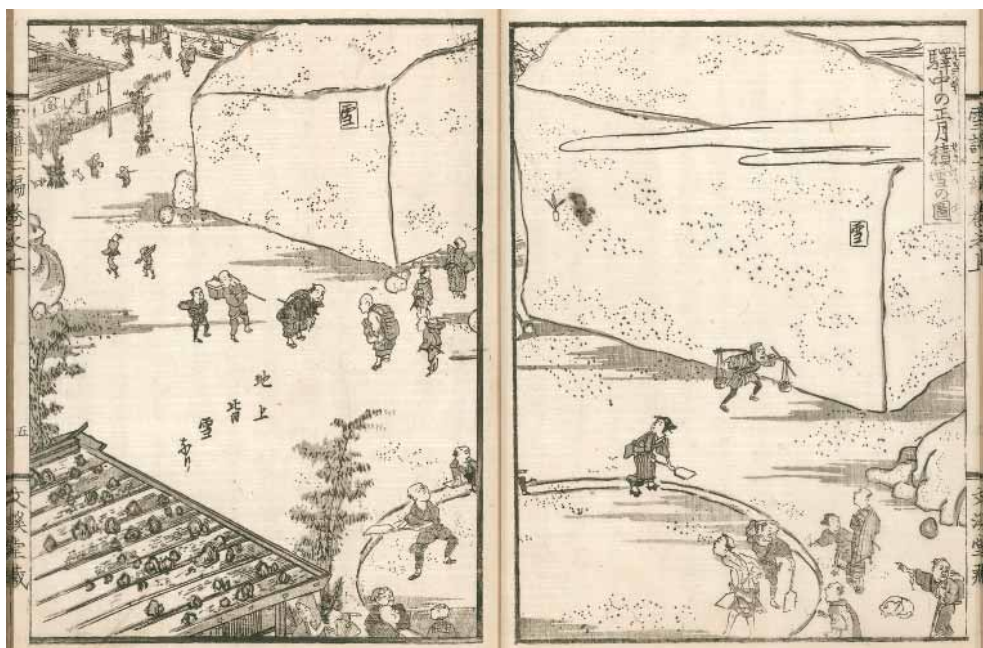
丁子屋平兵衛蔵版

とあります。

『北越雪譜』第2編は、その第1巻が春、第2巻が夏、第3巻が秋、第4巻が冬という構成になっています。その中から春の巻の内容を少しご紹介しておきましょう。

掲載した挿絵は、その右肩部に「駅中の正月積雪の図」とありますから、正月の景色を描いたものであることがわかります。絵の上部には人の背丈の5

倍はあろうかという雪の壁がそそり立っています。絵の左中央部には「地上皆雪なり」ともあります。絵の中央部には、旧知の中であった武士と僧侶が思わぬところで出会って、年頭の挨拶を交わしています。絵の中央下部にはまるで雪で作った土俵のようなのが見えます。よく見ると、羽根突きをしている様子。しかし、何か変ですね。そう、羽根突きをしているのは子どもではなく、いい年をした男女ではありませんか。しかも、この寒空に上半身裸の男もいます。これは、牧之の説明によりますと、越後の羽根突きの羽根は、空木（うつき）の幹の空洞部分に山鳥の尾を3本差し入れたもので、江戸でみかける一般的なものの数倍はある巨大な羽根を使用したそうです。そして、この巨大な羽根を突く羽子板は、なんと掘木鋤と（ほりこすき）と呼ばれる雪かき用の木製スコップ。これでは子どもが遊べるわけがありません。ですから、お神酒で少し体の暖まった男たちが、力にまかせて、この巨大な羽根を天高く突き上げるのです。落とした人は、罰ゲームとして、雪のなかでもみくちやにされます。もちろん、越後にも江戸のように子どもが遊べるかわいい羽子板もありましたから、ご安心を。幼い子たちはそれで楽しんでいました。



駅中の正月積雪の図

## 私の推薦書

「仙人はほんとうに  
いるのですか？」

毎年担当している共通教育科目「中国の古典文学」の授業では、毎回受講生に「質問箱」と題する用紙を配布し、疑問質問や感想を書いて提出してもらうことにしています。ときどきユニークな質問や即答しがたい難問が出され、私自身これに答えることを楽しみにしているのですが、その中に「仙人はほんとうにいますか？」という質問がありました。一見子供じみたこの質問、みなさんならどう答えるでしょうか。

『論語』に「子、怪力乱神を語らず」とあるように、中国では古来怪異や神秘に対する関心が薄かったと言われます。しかし、実際には怪異も神秘も大いに語られてきたこと、今村与志雄訳「唐宋伝奇集（上・下）」（岩波文庫、1988）に収められる数多くの物語に明らかです。書名の「伝奇」とは「奇（不思議）を伝える」という意味で、主に唐代に作られた短編小説を指しますが、これに先立つ六朝時代には「志怪」（怪を志す）と称されるやはり怪異と神秘を伝える多くの作品が残されています。伝奇・志怪ともに、仙人や仙界の登場する摩訶不思議な物語の宝庫です。

たとえば、「杜子春」は芥川龍之介の同名の小説のもととなった話。杜子春という男、仙薬作りをもくろむ道士に一晚無言でいることを命じられ、さまざまな苦難にも無言で通したのに、最後に女に生まれ変わって子供を生

み、その子がまさに殺されようという時、あっと一声あげてしまい、術が破れてもとの俗世にもどってしまふ。後半の展開は芥川の作よりよほど面白い。「李徴」は虎に変身した男

の数奇な運命を描く。高校の国語教科書にも収められる中島敦「山月記」のおおもとになった話。こちらは中島敦の作に軍配があがりそうです。

「離魂記」は恋焦がれた女の魂が肉体（魄と言う）を抜け出て男のもとに走り、数年後にふたたび元の肉体と合体する話。魂と魄とが離れたり合したりする話は少なくなく、中国ではのちに「金鳳釵記」という小説を生み、さらにわが国に伝わって江戸時代に敦賀を舞台とした「真紅撃帯」と題する物語に翻案されました（岩波書店、新日本古典文学大系『伽婢子』所収）。これには今条（今庄）や三国など、福井の地名がいくつも登場します。

「葉限」は「中国のシンデレラ」と副題がついているように、西洋のシンデレラ物語そっくり。シンデレラの物語には数多くのヴァリエーションがあるそうですが、この唐代に書

附属図書館運営委員

澤崎久和

さわざき・ひさかず



唐宋伝奇集

かれた「葉限」が最も古いものであることは、型破りの博物学者、南方熊楠が西洋で紹介して知られるようになりました。

「<sup>はんきょうさんじょうし</sup>板橋三娘子」は宿屋のおかみが泊り客に<sup>シャオピン</sup>焼餅を食べさせ、妖術によって口バに変えてしまう話。これをひそかに目撃した男が逆におかみを欺いて口バに変え、こき使うという面白い展開になっています。横浜国立大学の岡田充博先生によれば、この話は当時ソグド人の商人が西方の話を唐に伝えたのではないかとのこと。その類話は本家の中国はもとより、ヨーロッパ、西アジア、インドや日本にも及ぶそうです。

このように、中国唐代という一地域、一時代に書かれた物語が、時代を超え地域を越えて読みつがれ、新たな物語に生成変化し蘇生していくさまはまことに不思議です。詩が早くから個人の作であったのに対して、一つ一つの物語には無数の作者がいるとも言えます。

冒頭の質問にもどれば、仙人とは簡単に言えば不老不死の人のこと。そんな人が実在するのかと問われれば、否と答えるほかありません。しかし、ことはそう単純ではない。過去に多くの人が仙人の実在を信じ、仙人にならんと修行したことは認めてよいでしょうし（詩人の李白などもその一人）、なにより仙人や仙界という一連の観念が唐代伝奇に数多く登場し、さまざまな数奇な物語を紡ぎ出し、時代と地域を越えて人々の心を動かし続けてきたことはまぎれもない事実です。その意味では、仙人はたしかにいるのです。あたかも

物語そのものが「不老不死」の仙人であるかのように。

『唐宋伝奇集』の続きを読みたい人のために、昨年出版された二冊の文庫本をあげておきます。一つは書き下ろしで、志村五郎著「**中国説話文学とその背景**」（ちくま学芸文庫）。類話が豊富に紹介されており、本書に独自の見解も少なくありません。著者が著名な数学者でプリンストン大学名誉教授であるというのには驚かされます。いま一つは岡本綺堂著「**中国怪奇小説集（新装版）**」（光文社文庫）。もとは戦前に出版されたもの。著者は「半七捕物帳」などで知られる小説家・劇作家。両書はともに専門外のかたの手になるもので、伝奇小説が昔も今も多くの人々の心をつかんでやまないことを物語っています。中国の古典小説といえば『三国志』や『水滸伝』といった長編を思い浮かべる人も多いでしょうが、ここに紹介したような短編小説の世界にさまよって、結局は仙人ならぬ人間の不思議を味わうことになるのも、またいいのではないのでしょうか。



中国説話文学とその背景



中国怪奇小説集

# 数とシンメトリーと無限と

附属図書館運営委員

三上俊介

みかみ・しゅんすけ

図書館委員になると本に関して何か寄稿しなければいけないということなので、表題に掲げた切り口から数学に関連した書物を幾冊か紹介します。

G.ハーディーが療養中のインドの天才数学者 S. ラマヌジャンを見舞ったときにふと告げた、ロンドンから乗車したタクシーのナンバー 1729 について、それは自然数の 3 乗の 2 つの和として 2 通りに表すことのできる最小の数であるとラマヌジャンは指摘したそうです。すなわち、 $1729=10^3+9^3=12^3+1^3$ 。このエピソードは自然数についてですが、数の示す多彩な世界を案内してくれる本が J. コンウェイ、R. ガイ著「数の本」です。素数、フィボナッチ数と黄金比といったポピュラーな話題から、正 13 角形や正 17 角形の作図法さらには 52 枚のトランプカードをシャッフルすると何回で最初の状態に戻るか（これはフェルマーの小定理に関係します）など話題満載。入り口は身近なところから始まりますし、途中から読むこともできます。数学的に意味のある話題が採り上げられており、著者たちの博覧強記ぶりに全く畏れ入る、大変におもしろく読めた本でした。



数の本

どなたも一度は万華鏡をのぞかれたことがあるでしょう。基本図形が鏡面での反射（鏡映という）を繰り返して全平面に広がっていくその美しさに感動を覚えた方も多いと思います。シンメトリー（対称性）というものを必ずしも鏡映だけに限らずにある図形を不変にする平面（あるいは空間）上の変換のなす群と考えると、その構造や自然現象や芸術作品における多くの例と西洋文明に関する該博な識見を一般の読者に披露してくれる名著が H. ワイル著の「シンメトリー」です。同書に

ある放散虫の絵や蜂の巣の写真等を見ているだけでも楽しいですし、それらを通して自然界には何か単純な原理が働いているという風を感じさせられます。また、芸術作品といえば M.C. エッシャーの版画\*を思い浮かべますが、日本にも家紋や「紗綾型」「籠目」といった繰り返し紋様があり、その気になって周りを眺めると結構シンメトリーに出くわしま



シンメトリー



紗綾型



籠目

す。ただ上述の本の主題はそれにとどまらず物理学、化学、幾何学、代数学における「群」という考え方のもつ重要性を喝破しているところにあります。著者曰く「シンメトリーは芸術においても自然においても重要かつ広大であり、その根底には数学がある。」ワイルのこの考えを踏まえ、筆者の恩師の平井武先生が著された「線形代数と群の表現」では群の作用を平面や空間だけでなく関数の作る集合にまで拡張した理論が展開されています。一般書というには少し歯ごたえがありすぎますが著者によるとお孫さんに読んでほしいと思って執筆されたとのことで、ここに併せて紹介させていただきます。

最近その名を冠した予想が解決されたといわれる H. ポアンカレはその著書**「科学と仮説」**（1902年初刊）の中で、数学における「存在」とは何か、それは矛盾しないことである。数学的推理の本性は何か、それは単なる三段論法をこえて有限と無限をつなぐ架け橋である数学的帰納法であると論じています。（勿論、背理法もですが。）実際ユークリッドの時代よりずっと無限は数学と本質的に関わっています。志賀浩二著**「無限からの光芒」**は第1次大戦後独立を回復したポーランドに花咲いた、シェルピンスキーやバナッハを中心とした数学者達の解析学や点集合論における実在とし



科学と仮説

ての無限との格闘を記述した面白い読み物です。彼らの証明した命題の1つに「バナッハ・タルスキの定理」とよばれるものがあり、それはピンポン球大の中身の



無限からの光芒

つまった球を有限個の部分に分解し、それぞれを合同変換により移動して再び合わせると地球大の球にすることができるという一見奇妙な命題です。少し専門的になりますが、この命題は選択公理を使っているのです。存在は分かってもどの様に分解すればよいかについては全く分かりません。通常、数学に取り組んだり数学を利用したりする場合、その論理と形式の整合性と私達の直観の間は融和しているし、今後もそうであろうと考えています。それでは、先ほどの定理も逆理的に見えますが、構成的でないことが物理的空間とそれを点集合という数学的概念で認識することの乖離を防いでいることになるのでしょうか。普段は全く気にもかけませんが、著者も述べているように実在としての無限とはどの様に認識すればよいのでしょうか。この間にポアンカレならどう答えてくれたことでしょうか。

最近では数学書の新刊ブームといわれますが、筆者の不勉強もあり古い本が多くなりました。ただ、それらは今でも輝きを保ち続けていると思っています。

\*エッシャーの版画は <http://www.mcescher.com> 上で見るすることができます。

# ヘロドトス歴史, 司馬遷史記列伝, 古事記 ～意外に面白い世界の古典

ヘロドトス 歴史 岩波文庫 松平千秋訳 上・中・下 三巻  
司馬遷 史記列伝 岩波文庫  
古事記 岩波文庫, 角川文庫, 講談社学術文庫  
現代語訳 古事記 河出文庫 福永武彦

附属図書館運営委員

寺田 聡

てらだ・さとし

書は私たちの直接の見聞の域を超えてはるかに広い、異なる時空に属する未知なる世界に私たちを誘います。指輪物語～ロードオブザリング(トルキン)のようなファンタジー、銀河帝国の興亡(アシモフ)といったSFではわれわれとはまったく異質な世界を体験できます。一方で数千年を経た古典を読むことで、数百世代もさかのぼった先祖の時代のごとく消え去った古の事件や事物に触れられます。時を経ているにもかかわらず、かえって新鮮で現在にも共通する含蓄に触れることもあります。

私は生物工学の専門家ですから、この分野の、紹介したいライフサイエンスの書籍は多数ありますが、専門的で偏狭な堅苦しい書籍紹介は避けましょう。この記事を読んでくださる皆さん全員に、とても面白くてしかも有益でありながら、これまであまり読まれていない書物を紹介いたします。若い学生の皆さんからは敬遠されがちではありますが、実は意外に簡単に読めるものです。なかなか興味深い、そしてちょっとした「話題の種」にも使える、そんな世界の古典を紹介させていただきます。

わたくしの読んだ中では、もっとも面白かった古典は、ヘロドトスの「歴史」です。これは、歴史書というよりは、むしろ地理書か、あるいは脱線好きな歴史教師の漫談とでも



歴史

いったほうが適切かもしれません。本来のメインストーリーは、ギリシアとペルシアが闘ったいわゆるペルシア戦争なのですが、話はどんどん本筋から外れて、さまざまな地域の風俗紹介になっていきます。

有名なだけですが、ミイラの作り方が詳細に示されています。その内容を少し紹介しましょう。岩波文庫では、上巻の212ページに記載されています。まず、ミイラ作りに3ランクあって、価格がおおいに異なることがのべられます。ミイラ作りにランクがあるなんて、まるで「戒名」のようですね。高いお金を出すと立派な戒名をもらえる…、ええ、ミイラ処理の違いが、死後の世界をどう変えるのでしょうか。

最高級のコースでは、まず死者から脳髄と内臓を取り出した後、腹腔に香料をつめて天然のソーダ中に70日間おきます。その後、包帯で全身を巻き、人型の木箱の中にミイラを収めるということのようです。中級コース、安価コースについても記述されていますが、皆さん、ぜひともご自分で読んでみてくださいいな。

さてさて、ヘロドトスのひそみに倣って私も脱線いたします。もう10年以上の昔なのですが、本書に刺激されて学生時代、4週間にわたるエジプト個人旅行をしてみました。ピラミッドやツタンカーメンの墓には感動しましたが、これらよりも、地下深く数十メートルもの底に掘られた洞窟が庶民の墓で、そこに時々墓参りに行っていた、という話を現地で聞かされました。ピラミッドのすぐ近くにあるそういった墓のひとつに入っていきますと、深い深い洞窟で、中は真っ暗なのですが、とても涼しくて気持ちよかったです。外は灼熱の沙漠で、その暑いことは日本では想像もつかないほどです。地下深くは涼しく快適で、ご先祖がミイラとなってそこにおられるのなら、たしかにお墓参りに来たくくなります。沙漠ですから、土に湿気はなく、じめじめした不潔さとは程遠いです。静かで涼しい地下に葬られているのですから、死者の世界というのは、かなり魅力的に思えます。

一方で、現在の低俗週刊誌かと思ってしまうような記述まであって、びっくりさせられてしまいます。ある神殿で、信徒の女性は一生の間に一度だけ、その神殿で「売春」をせねばならないというのです。もちろん、一回きりのことだそうで、美人はすぐにこの儀式を終えられるのですが、少々容色の劣る女性の中には、数年間も滞在し続けることもある

のだとか。ヘロドトスは歴史の父というより、こういった低俗誌的な記事の創始者なのかもしれません。こんな与太話をまことしやかにたくさん伝えているわけですから。(ただし、注釈には、「いわゆる宗教的売春」とあり、古代では本当にあったことかもしれません)

「和魂洋才」という言葉がありますが、これは実は、「和魂‘漢’才」をもじってできた語です。明治以降の西洋を真似た近代化で言い出されたようです。わたくしたち日本人の文化というのは、やはり中国に多くを負っているわけですね。

中国の古典で面白いのは、なんと言っても「史記列伝」です。登場人物の生き生きとした姿に、大いに心惹かれますよ。無理して漢文で読むことはないですよ、現代日本語訳が出されておりまして、それを読みましょ。



史記列伝

この本が読みやすいのは、いろいろな人物を紹介しているということです。つまり、「短編集」になっており、数ページずつの一話完結ですから、無理をして読み進めなくてもよくて、興味に合わせて、読みたいだけ読めばよいのです。とくに刺客列伝は面白くて、ゴルゴのような殺し屋というのは、数千年の昔から続いている職業なのだと感心します。ただ、殺し屋稼業の成功談よりは失敗談が多く、むしろ人生の悲哀を感じます。頑張ったんだけど、そしてそのことに悔いはないけれどもこれが人生か、という思いが



あります。著者の司馬遷は友人をかばって宮刑（去勢）に処された人物です。挫折感というか失望というものに押しつぶされそうになりながら、しかしなお生き抜く強い意志力をもって生き抜き、史記を著したわけですから、すごみがあるのです。

他にも、中国の古典はたくさんあって、論語などが有名ですが、奇妙奇天烈で不思議な気分させてくれるのは、老子と荘子です。全く不思議な異世界がそこにはあります。

最後はやはり日本人らしく、「古事記」をお勧めいたします。これも、原文で読むのは大変です。現代語訳を利用しましょう。福永武彦さんのものが読みやすいと思います。日本国の創世は、イザナギとイザナミの二神によって作られたことが語られています。最初は失敗してヒルコが生まれ、流してしまったとい

います。その後、淡路島や四国、九州・本州などが作られたことが述べられています。隠岐島や対馬、佐渡、小豆島をはじめ瀬戸内海の島島は述べられているのですが、残念ながら北海道の記述はありません。

また、大国主命や天照大神の伝説はなかなか面白く、一度は聞いたことのある話だと思いますが、「古事記」をよんでみると、これが原典か、という感慨に打たれると思います。大国主の命に退治される大蛇は「越」の国からくるとのことで、福井県との関連も想像されますよ、なかなか面白いですよ。

世界の主要な古典を3つも紹介させていただきましたが、内容はなかなか深いのです。これらの面白さはなかなかのものですよ。何千年も読み告がれてきた本ですから、面白くないわけではないのです。ぜひ試してくださいね。



古事記 岩波文庫



古事記 角川文庫



古事記 講談社学術文庫

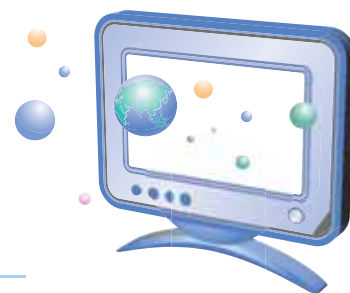


現代語訳 古事記 河出文庫

# 機関リポジトリの構築に向けて

学術情報課長 高木 昭

たかぎ・あきら



## 1. はじめに

情報技術の進歩に伴い、学術情報の流通において、急速な変化が起こっています。

1990年代に始まった学術雑誌の価格高騰は、大学や研究機関の購読中止を招き、そのため、購読中止に伴う発行部数の減少により、さらに雑誌価格が高騰するという悪循環に陥る「シリアルズ・クライシス（雑誌危機）」と呼ばれる世界的な学術情報における流通停滞が生じて来ました。

また、それまで冊子により供給されていた学術雑誌が、インターネットを介して24時間いつでも利用できる電子ジャーナルへと置き換わってきました。

当初は、電子ジャーナルの普及により高騰していた学術雑誌の価格が抑制されるとの期待もありましたが、実際には、毎年10%以上の値上がりが続き、各大学では購読を中止せざるを得ないというように学術情報を取り巻く環境は、益々、厳しいものとなってきています。

実際に、大学で購読している学術雑誌の削減に伴い、論文投稿した雑誌を著者自身の大学では利用出来ないということも起こっています。

このような状況を解決する手段として「オープンアクセス」という活動が世界的に活発に行われるようになってきました。

## 2. オープンアクセスと機関リポジトリ

オープンアクセスとは、学術研究成果をインターネット上で無料公開することによって誰もが障壁なく学術情報にアクセスできるようにする仕組みで、その方法としては、大きく分けて2つの仕組みが考えられています。

1つは、インターネット上の無料で公開されるオープンアクセス雑誌を創刊し公開の場とする方法です。

もう1つは、著者自身が個人サーバーや所属機関のサーバー等に論文を蓄積し無料公開する方法で、特に、機関リポジトリとして、ここ数年、全世界の図書館で構築が進められています。

機関リポジトリは、大学や研究機関等において生産された論文、紀要や教材等の研究・教育成果を電子的にアーカイブし、インターネットにより社会に対し発信するためのデータベースで、欧米を中心に約830（2007年1月末現在 ROARによる）の大学や研究機関で運用されています。

日本では、平成17年度から国立情報学研究所（NII）による次世代学術コンテンツ基盤構築事業として委託事業が始まり、北海道大学（HUSCAP）や千葉大学（CURATOR）をはじめとする57の大学において機関リポジトリの構築又は構築準備がなされているところです。

## 3. 本学の状況

本学におきましても機関リポジトリ構築に向け教育研究評議会等において図書館長より説明を行うとともに、メディアコモン機能の一環として整備することが附属図書館運営委員会において認められ、運営委員会の下に機関リポジトリ小委員会及び専門部会を設け、福井大学の教育・研究成果を広く社会に発信していくこととしています。

なお、昨年末には、リポジトリサーバーの導入を行い、現在、紀要や電子図書館資料の登録作業を実施しているところです。

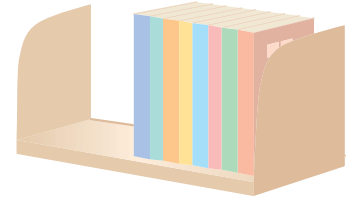
今後、学内説明会等を実施し、学術雑誌論文等の収集を促進し、福井大学学術機関リポジトリの一層の充実を図っていきたいと思いますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

# 医学系大学図書館のもう一つの役割

## —患者さんへの医療情報提供—

学術情報課課長補佐 木村 幹 明

きむら・もとあき



### はじめに

私はこの3月末で約40年間にわたる図書館員生活にピリオドを打つこととなります。退職するにあたり本紙「図書館 forum」の編集者から、退職挨拶を寄稿するように求められましたが、私の「天邪鬼」的な性格は素直にこれを受け入れようとはしません。

そこで、この紙面をお借りし、今まで心にはありましたが、いろいろな制約から表立って口にしにくかった「医学系大学図書館の患者サービス」について述べさせていただき、私の図書館員人生の締めくくりとさせていただくことにします。

先日、私が購読している国立国会図書館のメールマガジン「Current Awareness – E No.99 Wed, 31 Jan 2007」に興味深い記事が掲載されていました。それは、「図書館がコミュニティを変える！全米図書館行動計画策定へ」という標題の記事でした。この記事によると

アメリカ図書館協会は2007年1月19日、21世紀の図書館サービスのための「全米図書館行動計画 (National Library Agenda)」の草案を公開したとのことです。

草案は、「情報技術の革新と情報へのアクセス性の向上を背景に、図書館はその存在意義が問われている。」と指摘し、図書館という組織の存在そのものに対する危機感を表明しています。さらに、「21世紀の図書館サービス」を提供するために、今がまさに行動計画作成の好機であるとしています。この行動計画の一つに「社会と連携した図書館行動計画の明

確化」が掲げられており、国立大学の法人化以降、我々が図書館の存在意義について自問自答していることや、地域への貢献を求められていることと重なって聞こえました。

この行動計画の作成には、バーガー (Leslie Burger) アメリカ図書館協会会長の意向が色濃く反映されているとのこと。バーガーは、「図書館がコミュニティを変える」(Libraries Transform Communities)をテーマとして掲げているとのこと、これこそ我々図書館人が心に秘めている最終目標ではないかと感激しながらこのニュースを読みました。

私自身も平成15年10月の大学統合によって誕生した「福井大学医学図書館」へ、事務方の責任者として赴任した折りに、5年間にわたる「医学図書館事業計画」を策定し、これを基に今まで各種の事業(サービス)を展開してきました。しかし、この事業計画は大部分が大学構成員である学生・教員・医師などを対象としたものです。ここで疑問として残るのは、「医学系大学図書館は大学構成員に対してだけサービスを提供していれば、その役割を果たしていることになるのか」ということです。

医学系大学図書館が身を置く医学界では、従来の「医師中心の医療」から「患者さん中心の医療」へと流れを変えています。インフォームド・コンセントが普及し、医療情報開示やセカンド・オピニオンの必要性が高まる中、本学の病院でも積極的に患者サービスに取り組んでいます。

全国的に見ても医学系大学図書館が患者サービスに関わる傾向が増え、病院そのものの中に患者図書室

を設置するところも現れてきています。しかし、全国的に見るとこのような取り組みを行っているところは、まだまだ少数であり、患者さんへの医療情報提供の取り組みは充分といえる状況には無いようです。

しかし、将来的には、このような患者さんやそのご家族に対する正しい医療情報の提供が、医学系大学図書館におけるサービスのもう一つの柱となっていくのではないかと考えています。

### 福井大学医学図書館の取り組み

本学の医学図書館でも資料の館内閲覧だけではなく、患者さんをはじめとした地域の方への図書の貸出しや、患者さん向けの病気や治療に関する入門書を揃えた「こころと体の本コーナー」を設置するなど、それなりに門戸を開いてきました。おかげで、以前にはほとんど姿を見ることの無かった入院患者さんも徐々に来館されるようになり、自分の病気について詳しく知りたいという要望を聞くことも多くなってきています。

病院との連携としては、「こころと体の本コーナー」に配架する図書の選定にあたって、病院の各診療科の医師や臨床系をはじめとした教員から推薦を受けるようにし、なるべく医療者の目から見た資料を収集するように心がけています。

このほか、医・薬・看護学系の大学・病院図書館などによる全国組織「NPO 法人日本医学図書館協会」の北信越地区会において、初めて「患者サービス」をテーマとした研修会を開催できたことも成果の一つであったと考えています。この研修会は、本学会場に福井県図書館協会の後援を得て開催され、本学病院をはじめとした福井県内の病院関係者や一般の方々にも参加いただきました。

これらのことをはじめとして、本学病院とのサービス連携は、「医学図書館事業計画」の重要な柱の一つとなっていますが、これ以上の連携の糸口を得ることは難しく、「入院及び通院患者さんへの積極的PR」、「入院患者さんが来館しやすい動線作りの検討」をはじめとする当初計画を実施することができませんでした。

本学病院との連携は、医学図書館と病院の双方に人的・財政的負担をとまいません。今後、大学・医学部・病院の経営にたずさわる方々に「患者さんへの情報提供の必要性和重要性」を認知していただくために、医学図書館が積極的に働きかけていく必要があります。

患者さんへの支援ということからは外れるかも知れませんが、このほかにも地域医療への貢献事業も展開しています。例えば、医学・医療データベースや診療ツールの講習会を開催するときに、福井県医師会や福井県内の医療機関へも案内・参加いただいています。さらに、福井県医師会の機関誌「医師会だより」へ医学図書館紹介記事を寄稿させていただき、少しでも地域医療のお手伝いができるように心がけています。

### 医学系大学図書館の覚悟

本学の医学図書館では、今後のサービス展開に必要な情報を得ることを目的として、前述のとおり、昨年の夏に「図書館の役割－患者・家族への医療情報サービス－」をテーマとして、第18回日本医学図書館協会北信越地区会研修会を開催しました。その中で、闘病記文庫を図書館に備える運動を全国的に展開している「健康情報棚プロジェクト」代表の石井保志氏（東京医科歯科大学附属図書館）に「患者・家族への情報提供を模索する」という講演をしていただきました。

石井氏は講演の中で

現代社会では、豊富な情報に日常的に接しているにも関わらず、情報不足による不安や誤解が一向に減る気配がありません。氾濫する情報社会だからこそナビゲーターが必要であり、適切な情報を適切な形式で提供できる公的機関と専門職が求められています。その筆頭候補として、図書館とライブラリアンがまさに適任であり社会的使命があるものと思います。

と述べられました。

さらに、「患者さんへの医療情報提供と口に出しているのは簡単だが、医学系大学図書館にそれだけの覚悟があるか。」と問いかけられました。

具体的にいうと、

---

本当に患者・家族に医療情報を提供することが必要であると考えているのか。

一般市民に図書館を開放していることを医学生・研究者に対してどう理解させるのか。

本来の医学図書館として医療従事者に対しても必要な情報を提供できていないのではないか。

---

ということでした。

漠然と患者さんやそのご家族に対する医療情報提供は重要であると考えていた私でしたが、石井氏の覚悟の程をお聞きし愕然とする思いでした。事実、石井氏は本職を万全にこなしながら、ボランティアで全国を飛び回っておられます。医学系大学図書館の本業である「大学構成員への学術情報の提供」をこなしながら、さらに「患者さんへ医療情報を提供」するには相当の覚悟が必要と再認識しました。

## 最後に

今まで述べさせていただいたことは、今すぐに福井大学医学図書館として実現できる事業とは考えていません。定年退職者の後任不補充問題や新たな予算の獲得など、実現するには解決すべきことがたくさんあります。しかし、福井大学人としては実現困難であっても、学外からなら行えることもあるように思えます。

この「患者さんとその家族への医療情報提供」は、私の第2の人生の中で取り組むべき課題となっていて考えています。今はまだ具体的な形となっておらず、「いつ、どのようにして、どこで」実現できるかはわかりませんが、願わくは今まで公私ともにお世話になった福井大学医学部附属病院でと思っています。

この稿を読まれて興味を持たれた方（特に病院関係者の方）がおられましたら、ぜひ声をおかけください。一緒に患者さんへの医療情報提供の問題について考えてみませんか。

## 最後の最後に

長い間、お世話になった福井大学のみなさん、この稿を読まれた福井医科大学のOB・OGのみなさん、図書館のみなさん、長い間ありがとうございました。今後の福井大学と図書館の発展をお祈りし、筆を置かせていただきます。

## 医学図書館からのお知らせ

### 医学図書館の利用について—地域の方、特に地域医療にかかわる方へ

福井大学医学図書館では、以前から地域に開かれた図書館を目指し、福井県内の医療関係者や地域の方々に対して図書の貸し出しを行うなど、さまざまなサービスを展開してきました。

しかし、地域医療に携わっておられるの方々には、これらのサービスについて、直接お知らせする機会がございませんでした。

少しでも地域医療のお手伝いができることを願い、ここに福井大学医学図書館を紹介させていただきます。

#### ■館内サービス

##### ★閲覧・貸出

開館時間：平日＝9：00～20：00，土・日・祝日＝10：00～17：00  
(8～9月・年末年始を除く)

閲覧：特別な手続きは不要です。入館ゲート前で声をおかけください。

医学分野の図書・雑誌・視聴覚資料などを館内でご利用いただけます。

貸出：福井県在住の方であればどなたでも可能ですが、住所などが表記された証明書類が必要となります。(冊数と期間：図書のみ2冊1週間)

##### ★文献複写

図書・雑誌などをコピーされたい場合は、1階複写室にあるモノクロまたはカラー複写機が利用できます。

#### ■Webサービス

##### ★図書館利用案内

お知らせ、利用案内、蔵書や各種データベースの検索、電子ジャーナルの利用、有用なホームページへのリンクなど、医学情報への総合窓口となっています。(福井大学附属図書館ホームページへアクセス (<http://www.flib.fukui-u.ac.jp>) し、「医学図書館」をクリックします。)

##### ★電子ジャーナル

館内のPCから、ネットワークをとおして出版社のホームページにアクセスし、雑誌論文(医学分野を含む約5,600タイトル)を閲覧・ダウンロードすることができます。

・医学関連分野の電子ジャーナル

Science-Direct (Elsevier) [全分野], Springer + Kluwer [全分野], ProQuest-HMC [医学分野], Cell Press [医学分野], Nature とその Review 類 [自然科学分野], Science [自然科学分野], CINAHL with Full Text [看護分野]

・タイトル一覧は学外からもアクセスできます。( <http://atoz.ebsco.com/home.asp?id=uofml> )

##### ★医療情報データベース

医療情報データベースとは、どのような文献がどの雑誌に掲載されているかを調べるためのものです。医学図書館では、国内外の医療文献を検索するためのデータベースや、研究・診療に不可欠なツ

ルを提供しています。

これらも医学図書館の PC から無料で利用いただけます。

・主な医学分野データベース

医中誌 Web [国内医療情報], 今日の診療 Web 版 [治療法データベース], PubMed [外国医療情報], EBMR [医療従事者向けに設計された科学的根拠に基づく医療支援], UpToDate [(診療・治療・予防に関する診療指針)], JCR [投稿誌を選択する際などに便利な雑誌調査ツール], CINAHL [看護分野]

★オンライン目録

データベースで検索した医療情報の掲載雑誌などが、本学に所蔵されているか調べるためのサービスで、学外からも利用できます。

(福井大学附属図書館ホームページへアクセスし、医学図書館の「蔵書検索」をクリックします。)

★各種ツールの利用サポート

電子ジャーナルや医療情報データベースなどの検索支援を行っています。操作がわからないときや、十分な検索結果が得られないときはカウンター・スタッフへご相談ください。

(平日の 9:00 ~ 17:00)

電子ジャーナルや、医療情報データベースなどを利用するための講習会も随時開催しています。図書館ホームページへの掲載や、県内医療機関へ開催案内を送付するなどの手段を通じて広く案内しています。興味のある方はぜひご参加ください。(無料)

■所在・連絡先

福井大学医学図書館 医学情報サービス係

住所：〒910-1194 福井県吉田郡永平寺町松岡下合月 23-3

電話：0776-61-8258 ホームページ：http://www.flib.fukui-u.ac.jp/igaku.html

電子メール：glibmedservice-k@sec.icpc.fukui-u.ac.jp

## 篤志によって学生用図書が充実しました。

- ・内田附属図書館長（福井大学理事）より、看護学分野図書の充実を目的とした多額のご寄付をいただきました。看護学科学生の要望を中心に選書を行い、図書閲覧室へ配架しました。
- ・昨年に引き続き、旧福井医科大学 1 期生の土田晋也先生（つちだ小児科院長）から、学生用図書充実のためのご寄付をいただきました。医学科の学生の要望が多かった医学書院発行の「標準シリーズ」を中心に選書させていただきました。
- ・医学部学生の父兄で構成されている「医学部後援会」からも、学習用図書の寄贈申し出をいただきましたので、学生図書委員が直接書店へ出向き、自分たちの希望する図書を選定しました。後日、これらの図書は医学図書館へ寄贈され、図書閲覧室へ配架されました。
- ・総合図書館（文京キャンパス）では、工学部学生育成会から寄付をいただき、学生用図書を充実させました。

# トピック情報

## 新システム導入により利用者機能がアップしました!!

蔵書検索 (<http://karin00.flib.fukui-u.ac.jp/>)



検索画面



検索結果詳細画面

My ポータル (個人のページから図書購入・文献複写等申込み, 図書予約・貸出状況照会が可能です。)



利用者認証画面



図書購入申込み画面



文献複写等申込み画面



図書予約・貸出照会画面